

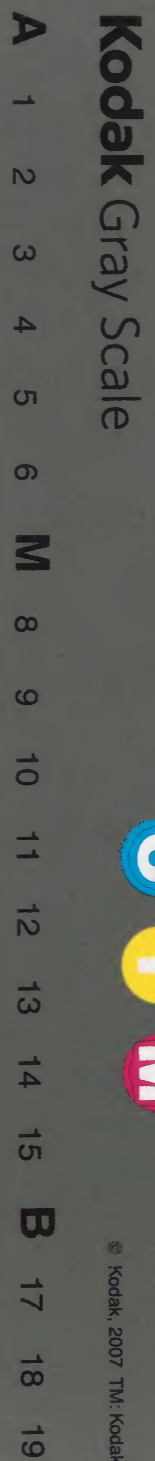
利根川番志

五

和書門類	二二九〇〇	一三〇〇	一三〇〇	六册
------	-------	------	------	----

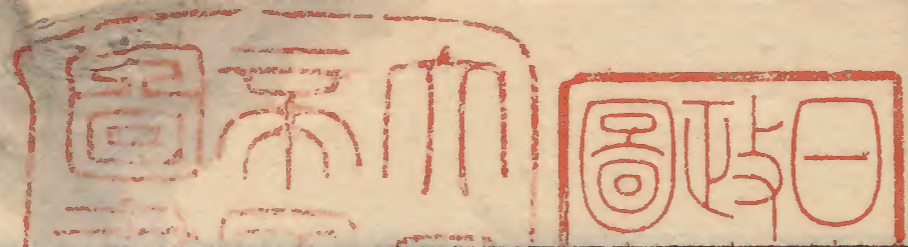
和書類	三九〇〇	七四一	一册
-----	------	-----	----

内閣文庫		
番號	和 22900	
冊數	6 (5)	
函號	174	117



© Kodak, 2007 TM: Kodak





利根川圖志卷五

明治十二年購求

下總 布川 赤松宗且 義知 著

麻賀多大明神

公津村稷山の上小あり里人てくろの延喜式不

載了所印播郡一座麻賀多神社是あり公津の村名臺方と本と

也下方江弁須大袋飯仲之形公津小属也まゝ公津新田あり古

へ神津と書たるより今臺方の下小鳥居河岸ありて沼の中不

鳥居建りおまをふいち神津ふるべし佐倉風土記云 應神天

皇御宇印波國造伊都許利命齋祭稚産靈神攝社本三十八座今

存者五座白印波國造社曰幸靈神社曰馬來田即女神社曰猿田

彦神社曰天日津久神社社司太田氏家藏貞治永正官幣祝文其

祖家清記詳焉有七井七臺併在社外四方三百步所謂初井花井

北井南井御卒洗井大井椿井乾有説教臺北有北野臺東有元松

五 印東

臺南有平松墓。天神墓。西有社司殿。臺花輪墓。神門左右百二十步。有七冢。正月七日採七種菜於七冢而薦之。古有祭田七區。七氏分掌以供祭祀。油免薦布免。穗掛免。團子免。神酒免。御齋免。巫免是也。今僅存其名耳。倭俗曰租賦爲免

神津八十墓。在神津村東北二三里原上。多數故名之。傳千葉氏也。世之瑩然不詳名誌焉。

超林寺。在神津。墓方。文明十三年平輔胤建之以常陸國杉室大雄

院五世。周齋和尚爲開山焉。

平貞胤墓。在神津麻野。碑誌曰。千葉貞胤當鄉諸人各敬白于時觀

應二年辛卯天四月日。其石今在超林寺庭際焉。

公津宗吾墓。公津村臺の山中不あり。成田より一里西の方あり。

墓碑左の如し

德滿院涼風道閑居士 右の服不道了彦七道明 德治左の服

小道安乙治道露 德松とあり。ふハ四人の子供あり

又同村菩提所鳴鐘山東勝寺 真言の過去帳不ハ道閑信士 俗名

宗吾兼應二癸巳年八月四日と見ゆ。是もとの改名あり。その後

寶曆二申年百四忌の節涼風道閑居士と改め。そめて石碑と

造立せらまきとあり。寛政三亥年院號とそへて今の石碑

不改め建つとある。石碑不四人の子供と。皆男子の名不あり

たふハ故ある。夏と持。宗吾の妻ハ同村理兵衛といふ。その娘

ふりし。是ハ宗吾出訴の以前。四人の子と遣して離別せしと

ひ也。故不妻ハ宗吾死しての後十七年とふからへて寛文九酉

年九月十四日不病死とといふ。改名ハ妙閑信女とおれ。過去

帳不見。由宗吾ハ父子五人。瀬瀬せらまき。事ハ世人のよく知了

ところあり。東勝寺本堂不在。位牌の文左不

位牌の表

道子 道明
德滿院涼風道開居士
道安 明露

同背面小

道開 俗名 宗吾
了 長男
安 次女
露 三女
明 季女
了 彦七
安 ト
露 ホト
明 ウ
露 ヂ

兼應二癸巳秋八月四日父子五人爲國民捐命寶曆二壬申年正當二百回忌而改涼風道開居士又享和二壬戌執行一百五十四忌之法會寬政三辛亥追諡德滿院造立石塔皆依領主之命茲嘉永壬子係二百遠忌由是造立廟堂及神像神版等若干物以當法事克追遠之禮

鳴鐘山主照再拜誌

鷺山壘

在神津村上千葉氏世居之天正中良胤時城廢焉

藥師寺

船形村小あり本尊藥師佛へ行基僧正の作開基不詳

鐘銘曰

下總國印東莊八代郷船形藥師寺應長元年亥年十一

月願主僧良圓敬白大工沙弥善性と見也

船形神社

佐倉風土記櫻山内津社在船形村千座山距櫻山社可

二里亦伊都許利命齋祭雜日吳尊以爲瀛津宮攝社三座曰賀志

波比賣神社曰阿須波神社曰八代稻荷神社是也云

根山神社

北須賀村門河とつ小所小あり牛頭天王と祭る此所

鳥獵茅一の場と云ヤウギリ綱ふて捕切と云義あり此邊沼

小真菰多一水鳥ハマコモの實と好て養了者也マコモの實ハ

麥の如き物ふして人え是と食之詩佛西遊詩草云美濃國今尾村足立

氏宅食菰米菰米之著於書自屈原以下及唐宋之詩人言其美者

多矣我邦未聞有賞之者予食之以今日爲初因賦一絶而記其事

淡於蕎麥香於稷真味初知在水郷非向君家留竹枝一生不信

ヤハライボ



素真

背の羽

頭の羽

胸の羽

同足

腹の羽

印東

四

有菰梁 菰米一名菰梁

谷原イボ 其の鳥畫ハ人目小カクニ故不見人稀アリ大さ

羽色とも鶯小似て黄セ多く帯たり五月頃より昏夜芦中にて

ス一ボウイ〜と鳴く聲螺小似たり大倉州志七十物産羽之屬 蘆

車々 潜蘆葦中北郷謂之蘆鴉夏秋入餌

ホコく鳥 小鳥あて谷原小栖む夏月昏夜ホコくと細き聲小

て鳴く鳩より小さ

天竺山龍角寺 龍角寺村あり寺南小洞穴沙伽陀池あり名所

以り諸國圭齊録下總國天台宗小二十石植生郡龍角寺村 龍角寺と

見ゆ佐倉風土記云傳和銅二年龍女化現奉金像藥師來建寺天

平二年釋命上人再興諸堂三年天下旱魃命奉勅說法祈雨一

叟長可八尺進曰我小龍常居南池深浴上人法澤何惜一軀請以

身換兩後必見我骸而證之即是為大龍所罰也忽然而去兩從至

馬後七日果有龍身今裂三段頭墜于此乃金字寫經併座堂下寺

始曰龍閣於是改龍角腹墜于印西龍腹寺其尾墜于香取郡今大

寺村龍尾寺是也貞觀元年慈覺大師住此說法天曆三年三月八

日異僧來彫金剛神一龜畢忽失所在柱上留題曰此寺藥師乃西

天竺祇園精舍療病院之像故我為彫金剛神而猶恐人不信一軀

而止我是昆首羯摩也正曆中運慶續刻右金剛神化作即左今共

存馬兼久二年上總介平常秀重修營常秀十葉常重曾孫稱坂平

次兵工也正應三年十一月鑄巨鐘文明中焚如而寛永三年改鑄

馬文明永正再罹火災平勝胤修造馬天正八年又有災平邦胤重

造營馬相馬日記云崎村とりの所行りたりと登りていと

むつりとの近きとふり天竺山龍角寺小龍神の社あり月

ことこの朔日十五日廿八日小石壘と敷設け昔ハ人住ミと又

といふ洞穴三ありて中石壘と敷設け昔ハ人住ミと又

おふりさ小隠小座頭とひ小根ハひとつて七木小今れと上

うさふはへりとはさくて谷下八千把の池とて水多
くもかきり有りのとさきく所ふ松一本たてりこハあるひふ
つめりこの池のあさこへ一日千把の苗とらむとかせさ
るふ子獲れ困してさふらると埋てさるの松もて千ハ
池とりの名ふとそ

駒形明神 安食村ふあり佐倉風士記云社司木内晴風十五世末
内三郎宗文正安二年九月記曰下總国埴生郡安食郷駒形神社
郡司大浦朝臣廣足所祭穀神也天永二年夏五月廿一日安食郷
大水同三年夏大旱仁平元年夏六月十五日又大水民大飢凡三
年矣於是同年秋九月九日建社於駒形山上用祭五穀神焉其社
號曰駒形神社同二年五穀大孰是年郡司令曰是則神之賜也自
今以後民可得安於食也請改號其郷曰安食郷又置神田使木内
晴風掌祭祀焉安食郷舊名川崎郷郡司大浦朝臣廣足 崇神天
皇七世孫御諸別王之苗裔也今社司木内氏藏之享保四年吉田
兼敬卿書跋云

鷲宮 同村印播江へ指出たる山の頂ふあり別當正徳寺毎年正
月十一月初酉の日遠近の老若参詣群集す此所印播江の下流
ふて長門の口と云長門のあふて印播江と將監川と落合ひ
夫より東の方へ五六町流れて利根川ふ合て三方の船着ふて
至て賑はく繁昌の地あり

布録新田 南將監川と北下利根川との間あり一嶋ありふの嶋
上へ木下より下安食まで堅二里横一里とりの元録年中開發
村數二十五川除堤周圍長六千四百五十七間其内三千五百五間
へ北利根川通り二千九百五十二間へ南將監川通りと古書ふ
見えたりされど古くよりあり嶋ふ常總軍記ふ布録ふ
布録但馬丸岡喜一同彦市ふと見えたり
藤藏河岸 生板真山新田兩村入會の地あり下總常陸兩國ふ跨
る其ふめ藤藏と云獵師住し所也ふ其名起きりとぞ今へ利根

川運送の荷物龍ヶ崎邊へこの河岸より上下する由至て繁

昌のところあり龍ヶ崎 江一里

龍ヶ崎 常州河内郡あり仙臺君の御陳屋あり享保十三年水無

月下向みちのく此大守羽林中良將吉村とつゝる此の鹿嶋

道の記ふ云その日へ道とやうなれば暮ふなり戌の刻をく

る程ふ布川とつゝる所に着てやどりぬ又の日常陸の國ふい

るるつゝふ二里斗つる道なれば己の刻をうちた至りつたぬ

是龍ヶ愛あもこの領地のあまればとここれ者ども出あひ

てあるひしてうあさとなと見せ侍とぬそのりみ文治の比を

ひ我祖常陸入道念西宗号朝 同宗村等の住給ひ一真壁郡中村の

庄へ此ところより十餘里を越たてをさうなるとし残つふ

此度らふ乗る序ふ見まほしくおもひ一ふんど遠なれば見

どして過る事いと本意ふりの朝村主のかと初とおもひ一

の事もあつうりうりなまじ

近から行て見ま一筑波根に裾の田井の世々のあま

あと北ふあさして古城つりこれへ天正のころ土岐左衛門尉

頼貞といくる人住たる城ありといふ四方ふ堀のくこありて

築立たるやうある山城あり樹木枝とありひ茂とあひたる中

ふ太神宮鹿嶋の神社あり上へ平らふして中ふ谷とへたて

て二の曲輪とらまうと見えこり其曲輪の東ふ龍ヶ峯とい

へるとと海つり爰ふのぞみて見渡し侍るふ東へかまは海

見えて眺望かぎりなり南へ田面さうりふ片がさそありたり

田子のさあぐうりるは菅の小笠うらきて聲残あげてうこ

ひのさるはふいと真ありてまばらしく時をうつぬ

乙女子が笠のあはれぐく小山田小早苗とてれいとほあげな
 る爰と出て大統寺盤若院あといつゝ寺小行ぬ寛永のころ山
 戸土佐といつゝもの此所小久しく住居せむそれ人建立せ
 一寺ありといつゝ今ハ領地のうらまきバツと、ウの寺領地つ
 け置ぬあふドハ僧爰小きたる事とよろこび出會てとえちひ
 ありく南ふあたりて愛宕社ありそれいちハ盤若院別當つ
 とむるとて先たち行ぬこの山下小あがと塚といつゝ古塚あ
 何の由急ありともあらだむりしよウツひつとある名あり
 とつふ見るとかかぶとのもちとふせとふやふる形あり夫由急
 うつゝつゝあふべー夕つゝ舎と入て由あふふとてを
 へぐさのりーちつと志のぎうれつひふと志た、めてあ
 おふ日をくらし侍る小庭の木ぬくさ隠小蟬の鳴を聞く
 おのがあけらふささみえ猶この頃れあつさやあふ蟬の鳴

ら望夜ふ入て所小片けあく目代郡司あど残めー出て今ま
 での所れおきてふどくハくたつ経あらとふちめを事おや
 かと日が本國小替り他の領地も中下りたる事ふればけらふ
 心をつけて民の勞をふくつとふべーよそ人とあらそふ事
 ふくれあどつひふくめあまハ河船ふ乗て潮來のつらやで下
 るべー船の數出さむもところれはつらひよーあー供ーあつ
 ちのも半ハ中湊やで陸地を陸ういまべーきたーきりさり船
 みてハ免ーさそべきよーささめていこくふけゆけバラちや
 去みんハ夜半さる頃より風吹出ぬ明行頃さのふ行てあひ
 侍る大統寺盤若院來りなぬめいーちり我このところふさ
 たふさふーふとて筆の物といこくのぞさーらバ辞がこくて
 大字ふ書たぬ詩と彼ふたりの僧ふあさへぬ寺の具となさむ
 とてよろこびあへるをいつとくつゝつゝくたむてあむむ

ざあり猶風やまら船のうちいりぐとせへば追手あまはさ
りあらとと宿のあふとつふふあうせて日出る頃ふ出ぬ一里
餘り行て利根川のやとりに至る藤藏爰より船ふのれり側近
さもの十餘輩とくざりておふと船ふのふ外さふれその船五
艘ふふつらへて漕出ぬ所の男女川岸ふはどひ見物せりのと
それぐち浪をこし高うちかども河船ふれば何のあはれ
う記事もふあつさへと去れそて、身ふむ風の秋々と
うりあるとる

こぬ秋えうかづる船ふのふと追手まぐしと川うぜぞ
ふく

潮來の宮本水雲云龍ヶ崎ハ信田郡江戸崎の城主土岐美濃守
治頼が二子左兵衛督胤倫の居城あは其上正平五年北朝康春
日中將顯國三村より起りて駒馬沼田城ふ入とつふ事鶴岡社

務記ふえたりハ土岐氏の後ふ櫛とる龍崎あはへし駒馬不
古城あは龍崎ハ其隣村あて殊ふ新地ふまはなり且其城田地
を東南ふうけて沼田といふ名目ふもうあはり云

常總軍記卷十二云常州江戸崎ハ土岐主膳龍ヶ崎ハ土岐大學
津守頼光の嫡頼國の末子美濃守頼房始て美濃國土岐郡に住
そ是土岐の先祖ふと然る其頃人皇七十二代白河院御宇兼
曆年中六孫王經基の次男武藏守滿政の曾孫あて駿河守定宗
とつふ人頼義義家御父子の武門棟梁の如く君の御おふえも
よきととそねいり小身なれハ自力ふ叶ひく頼房の家
督美濃守国房とて、めて隠謀とふせりかくて濃州青のり原
一戦ハ打よけ定宗ハ腹切て死に国房ハ罪と謝して降参せり
官ふさせり是より數年とへて土岐右京大夫頼統常陸の国房本
徳大寺大納言殿と守りて當国ふ來りて住居は是江戶崎龍ヶ
崎土岐の祖ありされハ年へて武勇の家ふれハ近郷を伐とり
推塚野塚羽賀小の古波大屋佐藏君嶋大室あはひハ庄布川幸
佐塗戸半田長峯君山長掉以下都合八十三郷と持つハ信田
郡河内郡ふのり衣武勇の臣下多く旗又數多あり元來
同流ふして今ハ兄弟の中也去ハ龍崎を攻まハ必江戶崎より
り是を助け江戶崎と攻れハ又龍崎後誥せハ必江戶崎より
も是とらりり云

川北

稻敷郷

龍ヶ崎の東あり八代村といふとあり宮本水雲云今の
 八代村ハ和名抄稻敷郷あり今ハ其地ハ稻塚と云ふあり風土
 記常陸風信田郡常陸風信田郡の下ハ風俗諺云葦原鹿其味若爛喫異山宮矣
 常陸下總二国大獵無可絶尽也其里西飯名社此即筑波岳所有
 飯名神之別屬也とあり葦原ハ今龍ヶ崎以下長棹源清田より
 下總の地ハつたり新田とありこの地ありて古葦原あり一時二
 国の界あり地あり残以て二国の人々獵せし所といえたり
 扱飯名ハ即後ハ稻とつりしものありて稻敷といへりハ飯名
 の神の敷地あり故此名あり後ハ八代とふれりも社ありて其神
 社社より地名といふなり此地下總相馬郡於賦駅續日本記和
 名抄郷名の意部郷より此地とへて信田郡榛谷駅今羽賀村也
 同地而今其地不詳
 小つこる古の官道あり故ハ扶木抄喜多院入道稻敷の里ハ
 たらぬぬいらんりて祢次郎百首鴨いかにきや外面の田井ハハ
 生

りふせ皆此地とよむる歌あり是官道あれば自然詠歌のま
 一のあり

栗林義長傳

常州岡見の長臣栗林下總守義長といふハ同國河
 内郡根本村の農夫忠七の三男竹松の孫あり云傳ハ常總
 軍記卷十云 文畧 根本といふ里ハ一人の農夫あり名を忠七と
 といふ貧あり者といふとも慈悲ありて正直ありて一人の母ハ
 孝あり或時母少一病事有るハ不是残んト土浦ハ至り藥
 と求め其ハへるさ根本ハ原ありハまり人里遠ハ野原ありて
 道ゆく人も稀ありけるハ古狐松のりけハ寐入て居たりけ
 ると其ありて獵人志のびよりて射てとらんと稱らひと
 の忠七ハ是と見てふむんと思ひ助けやらんと高らハ不咳と
 去たりハバ狐ハ大ハ驚て目と覺ハ草むらの中へ入り
 入るる獵人ハ大ハ腹立獲ものせりへせとのくハ由忠七

さぬぐと詭言ふれとも猶人のさらし聞入を忠七是非よく
二百文有るる錢をうの者不遣へりやうくと云ひて我家不
帰りたり然し其日の暮つくと五十有餘の男一人をたらし
の女を連れて忠七方ふ来り云らるやう我ら奥州の者あて録
倉へ行きのあが日暮て難義ふ及ぶ何卒一夜の宿をわけて
たべと涙ながらにひたす故母も忠七もふびんと思ひ道も
志さぬ野原なるた足弱を連さるべ定めてあんざるべ
一夜の明させたつと云へると其夜の二人をとあさりたり借翌
朝ふあるとわれバウの女泪をるが云らるやうとづらら奥
州岩城郡の者あが不仕合の事ありて身上を志さる録倉の
伯父の所を尋ねんと譜代の家來を供ふつれ此所もて来り
が昨夜とらに寐入一時の男の路用を持て送りと見ゆらもく
もくやうれ最早後へも先へも行がた何とぞ録倉へ参る

追ひくるる憂ぐげんも仕るべれは御くらまひたぐりと
泪流して頼るるに母も忠七も實心の者あてふびんと思ひ
然らば四五日足をやせめ給へ何とぞ録倉へ送り届け申せ
べとてさし置らるかくて此女容顔美麗のとあらば發明ふ
して農の業も是より早く糸機針仕事いと川とてあらざる
事あく何復もやさしく母もよく仕へり母も殊の外氣
ふ入近所あたりの者追も譽さる人いふなりなりて月日
小関守あく四五日と思ふ内ふもや四五十日も過らるる近所
の者心つき母と忠七ふ相談隣家の弥兵衛を仲人とする
方咄し調ひし故忠七と夫婦ふとていふなり早くも八年の
星霜を経て三人の子を設け姉のお鶴は七才ふなり其次は亀
松とて五才あり三男竹松は三才あぞ成ふらる折しも秋の末
つと女房の庭の方をうつとて詠め居らるるが泪をあらが



真



みどり子の
まつとこら
をまげけ
あふ
ふすと
こす

口を思つても人間に相あまきさのふらふらとひ思ひしがもや
ハとせ残過さうら三人の子追設けし夏あきと浅中しさい根
本が原ふ年経たふ狐ありひととび人ふさとられてい人間界
の住居ありて畜生の行へこそあふとれと泪を流し一人
おとして泣きめけども悔てうへらぬ身の上あまきさるあても
不使なるい三人の子供いとをい母うへ様忠七殿も名残
をい此ゆく別きて行ふきばさぞや後あてうらむらん堪忍志
てく忠七どのとくせりへしくせさくさ泪と諸共い一詩を
あてめ竹松が帯へ結ひつけ夕暮る根本が原の古塚ふるく
く別きて帰せらる

昔日贖死野狐身偶嫁人間入忠家鴛鴦被暖八年夢積夢一女
二男生花晨月下撫前後某日冬夜戀紡績被知三朝吾生所帰
去古塚自別離別離悲淚今難堪月三更女化之原

傳來昆須鷄摩の作彌勒菩薩の尊像と安置し奉り則ち寶刹と草創し
龍華山安穩寺と号す爾來日國家安穩祝禱の護摩修行日々怠りあ
く逆賊も稍滅亡し神威日々小かやと靈驗まじく著り于茲元暦文治のあひ
く大杉大明神平氏の横行を疾く假ふ常陸坊海存と現し判官源の義經公
と助け平家追討の功成て後此地不帰り我像を自ら彫刻し大杉殿に納め亦
此地小して天下泰平五穀豊登諸の難厄と救護し病患と穢し悪を抑へ善
とらけ禍福響音の音應り如くふらめんと言畢て文治五年九月廿七日彩雲
乗して忽消失給ふ依之例年九月廿七を祭祀の日とし今不行す以上録起
の趣意
名物 せんへい 是より西浦須賀津河岸へ十八丁利根川押
信田の浮嶋 霞浦ふあり常州信田郡に屬す浮嶋正此に居り今船ツカ山
鞍懸の松蛇峯人見の塚馬こころふとのふ名所あり又この島の三郎左工門雷
のむらといふ物を所持せりと云り石小有す金も有けしとあらん何れもせよめつら
し記え此ありとそ 按ふ雷の落さる所あり想山著聞奇集卷四に云
ひらいてのありしとありし想山著聞奇集卷四に云

阿波
大教殿

牛堀

イタ

浮

又舟キ

スガツ

本社

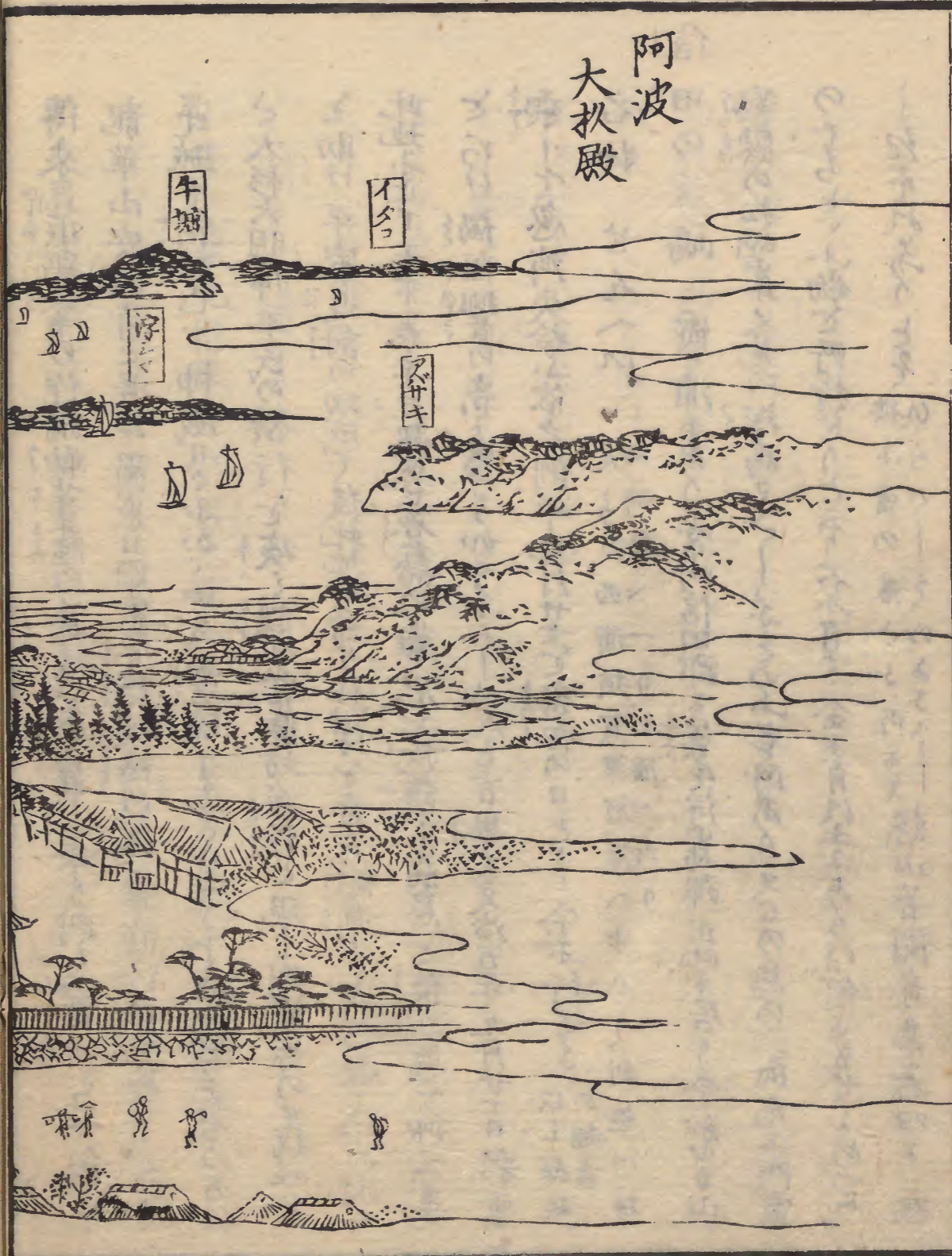
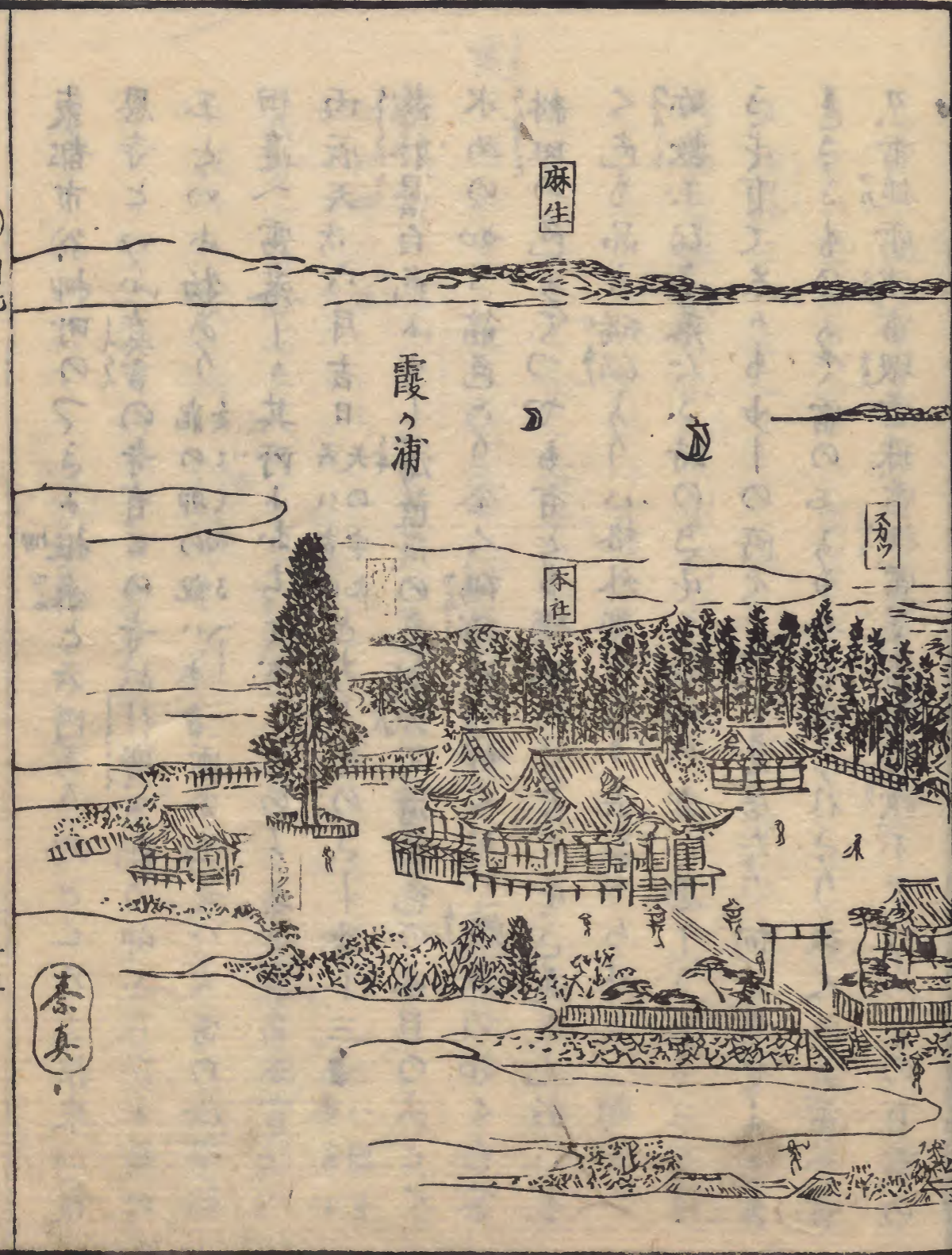
霞の浦

麻生

五
川北

十五

素真



東都市谷柳町のつま根来と云所あり此ところ根来山報
恩寺といふ真言の寺有この寺に什寶龍の卵ふらひ雷の
玉といふ物あり龍の卵の説ハ本書雷の玉是ハ大雷の砌早稲
田邊へ雷落し其所おちて有しとのことあり裏帛ふ寛政八
丙辰天次六月吉日天ハ古の字也とあり玉のさし渡し三寸本書ハ
惣躰曇白色少し薄藍鼠の色を佩て薄茶色の木目のふとく
氷めの如き筋色あり全く碼磁石の如く又ハ蠟石の如く白茶
紺斑の色あてつやも有とも碼磁のこどくまを通る光彩ハま
く色も品も碼磁よりハ格外劣りたり去るうら外ハ類なき
珍敷玉なり落たる時のさまや下の方と思しう所ハ三角の
さそ有てさるも少しの所そと皮とを居たり何るもせよこる
まさるものもて雷の玉もやと思れり或人の云雷斧雷
刀、雷槌、雷礎、雷環、雷珠、雷楔、雷墨、雷劍、雷鎖、ハといふ所の有雷の

落とる跡も有その也三味線のをちの如くもて印部の焼物の
こととさ紫黒色ふるハ雷斧ふるへく九くして僧の袈裟よりく
了掛絡のこととくもして白色もて青を帯たるハ雷環もて牛角
の如く本太く末鋒り紫色も赤を帯たるハ雷鎖もして石もあ
らむ土もあはる漆の如さかてやうハ雷墨ふるへといへり
左をれハ是も全く雷珠の類ならんと思はる此類成へ
霞ヶ浦船軍 江戸崎龍ヶ崎の両土岐兵船七十餘艘霞ヶ浦ら
浮へちつ信田古渡不出て浮嶋彈正黒田石見を案内と此
江戸崎の懐懐てありたり上ハ佐竹近年疎意せしむる心
いふとく思ひハ彼篠下を棄し江戸崎の上岐も味方せり
其勢二百餘両土岐の先手を勤め惣勢合せて千五百餘人兵船
も取のハ霞ヶ浦へ押出たり折ら順風程よく難場を
はくくなく押て行此より新庄藏人直昌聞て今佐竹より加勢
あさふおそれて土岐勢を船よりあけ立るものならハ川を渡

さき一敵とひとしく味方氣おくれして千も利有へから
以傳へ聞浮嶋黒田ヲ攻手不加ハリ先手を勒むるも
黒田石見是ハ
古一老臣也浮嶋も同断あり浮島黒田こそ船軍もなれしもの
なき去とも小勢あるへおそろふさらば西土岐も来り共
陸路の戦いともあれ船軍不於ていかさくらつては次第あり
いさやさへなつて逆寄し手並の程を見せよやん々と下知し
て兵船三十餘艘軍兵五百餘兵霞り浦よりへて操りりんて
富田の岸ふつく兼て新庄り制作めて艘船逆船三十艘船と云
板下てより切て中のく見さるやうに敵船の中へ漕いきて
四方の窓をあけて子鉄炮をつくへりく仕りけ也。逆船と
ハハ逆ろを仕りけ敵の中へ乗入て前後左右と
自由漕めく仕りけ也昔ハ島逆ろの争ひ是也
西土岐ハ風もふくして難なく漕渡りて富田をさして行なうもろろ向
ふあつて兵船のろこの手見えしハ浮嶋黒田さつと見渡
し麻生の新庄藏人々藤巴の旗印かり定めて向ふとこえて候


我々先不進むべきあり引つゞいて漕よせ給ひと船を猛ふそ
しらせらるる不俄不民の風吹起り空うさ曇り雨を催し寄手の
船自在ならん藏人是と見て大ふよろこび得たりやかこ
とくだんの船を矢のおとく寄手八十艘の中へ漕のきて火水
みあれとせめたどろろ西土岐えあそぞ大事と下知をふし豎
横むあもん不戦へ共麻生勢ハ船軍ふあれさ上船ハ逆ろと
艘船あまハ飛鳥のごとく自由をなし殊不艘船ハ土藏のごとく
作りふれバ敵の矢玉ハツもあたらん空矢のこもて有れば
新庄勢のさこころ乗こしくさぐさ切立られハ寄手討るく
このおびたろ時崎弥兵衛羽賀次郎松山兵衛村田次郎左衛
門佐藏齊宮太田半弥柴崎忠平伊佐津太郎と初めとて究竟
の兵八十餘人討死を新庄ハ唯一戦不敵船十八艘今捕し勝と
こ揚て帰しりバ直昌が武勇いと高くぞ聞えらる

湖水眺臺

乾子何多し草の筑波山将まきぬ小土浦の
 城色を芦乃る小尺ゆる高家の麓を流るの
 永くもあやまきぬ男の川迤末は里の川の
 流をらり多潮末の森に遠くへりまきぬ
 岩のききぬ浪を菊自り伏るりぬし
 加茂の神の社を懐び沖宿立木の雨大悲
 窓多し北岸を歌も大慈の暁を空くまきぬ

高須の松は安け清の舞をかき立て又くぬ
 舞舞急をを願きぬ井末の杜露を有るぬ
 勢をう峯勢尾山送身也架り岩流も終り
 田舎子里を清良を理常よのあきり深き
 波もふや海舟夢のまきぬ人形終
 又くぬまきぬ松家の浦を魚

二の目よしくいふまぢる柳

井田舎 

○是より川南

一宮大明神 下總殖生郡矢口村小あり 佐倉風土記云傳延長二年九月十九日祭之

二宮大明神 同松崎村小あり年記詳あらむ經津主命と祭と云

三宮大明神 同成田より二三町西の方郷部村小あり祭神詳くあらむ相馬日記小郷部村小殖生大明神の社ありて鳥居不當國三宮といふ額をかくこい神名帳小見えぬ神あり云

三熊野大明神 南羽鳥小あり延長元年八月十五日祭といふ

北えつ稿荷社 龍臺村利根川の畔堤の上小あり

長沼 佐倉風土記云沮於殖生郡北南北可五六里西東可六七里一六丁多利於溉灌便宜於漁釣舟楫亦通但不可致大爾首南尾北尾為兩派西過安西新田東經西大須賀俱入利根川亦時有陰火出水上馬長沼ハハ極ありて利根川の船ハ通ゼテ漁舟楫の之あり

新妻川 同書云一水出畑田東西北流十餘里至下金山西一水出

于印播郡江弁領西東北流七里至于下金山西二水會於此西北七八里而入長沼馬佐倉風土記之里程皆六丁一里以下准之

飯岡川 出東和泉東西流過飯岡歷荒海南橋下而入于長沼

水楸川 出大室東十里西北流過水楸而入於長沼

長沼城跡 長沼村の上小あり城主詳あらむ常總軍記千葉手配

の条小ハ長沼ハ大野修理と見えたり

源太河岸 香取郡猿山村あり金江津と相對是是より滑川觀音

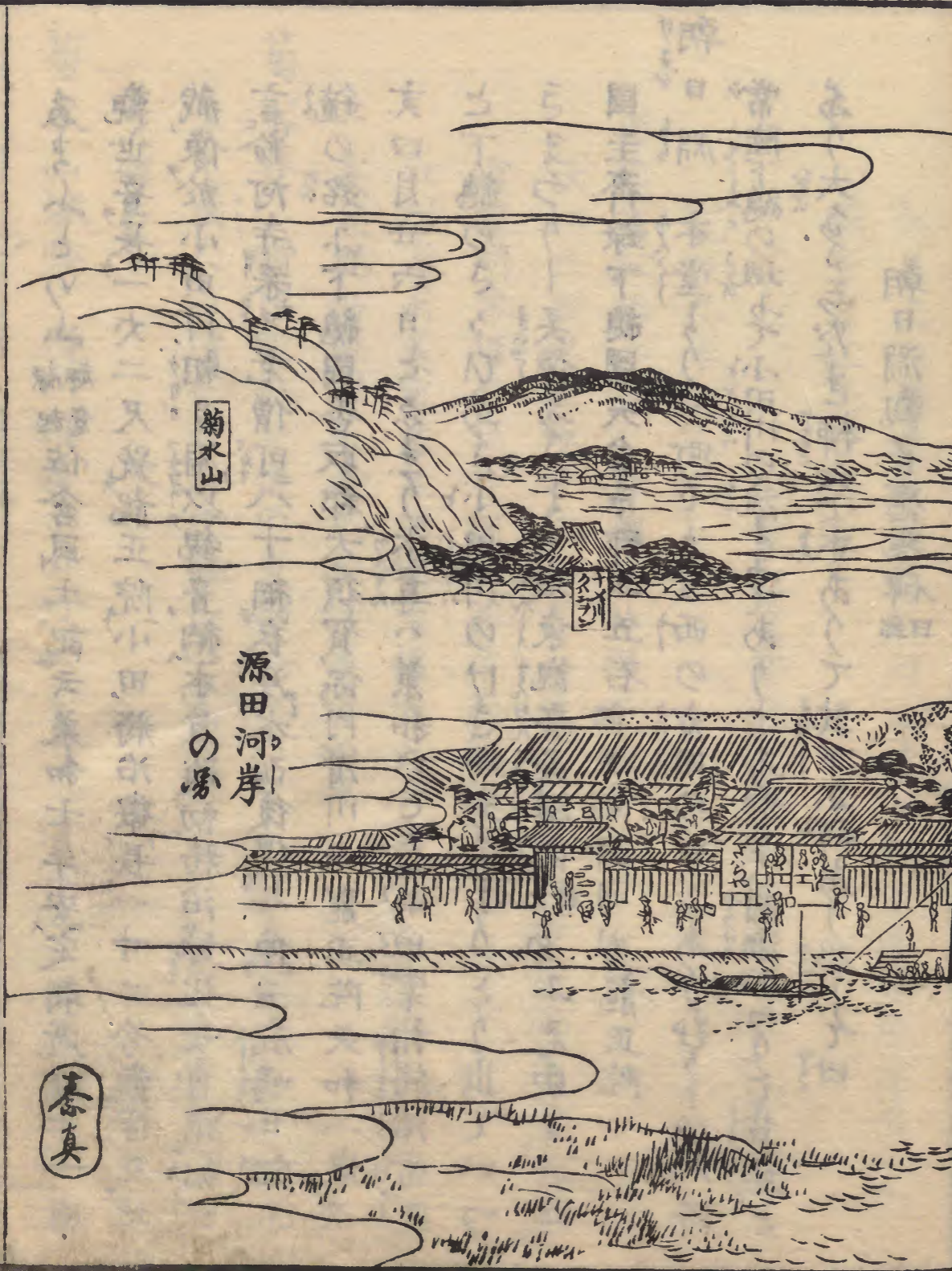
へ八町成田山へ三里

滑川觀世音 滑川村小あり滑川山龍正院といふ坂東順禮二十

八番の灵場あり本尊十一面觀世音御長一丈二尺定朝御作脇立不動明王

昆沙門天あり人皇五十四代仁明天皇の御宇義和七庚申の年草創御堂の側小船越地藏の堂ありこの地藏尊綱もて朝日淵よりすくひ上りふといふ觀世音ハ御大一寸二分本尊の胎中小綱め

川南



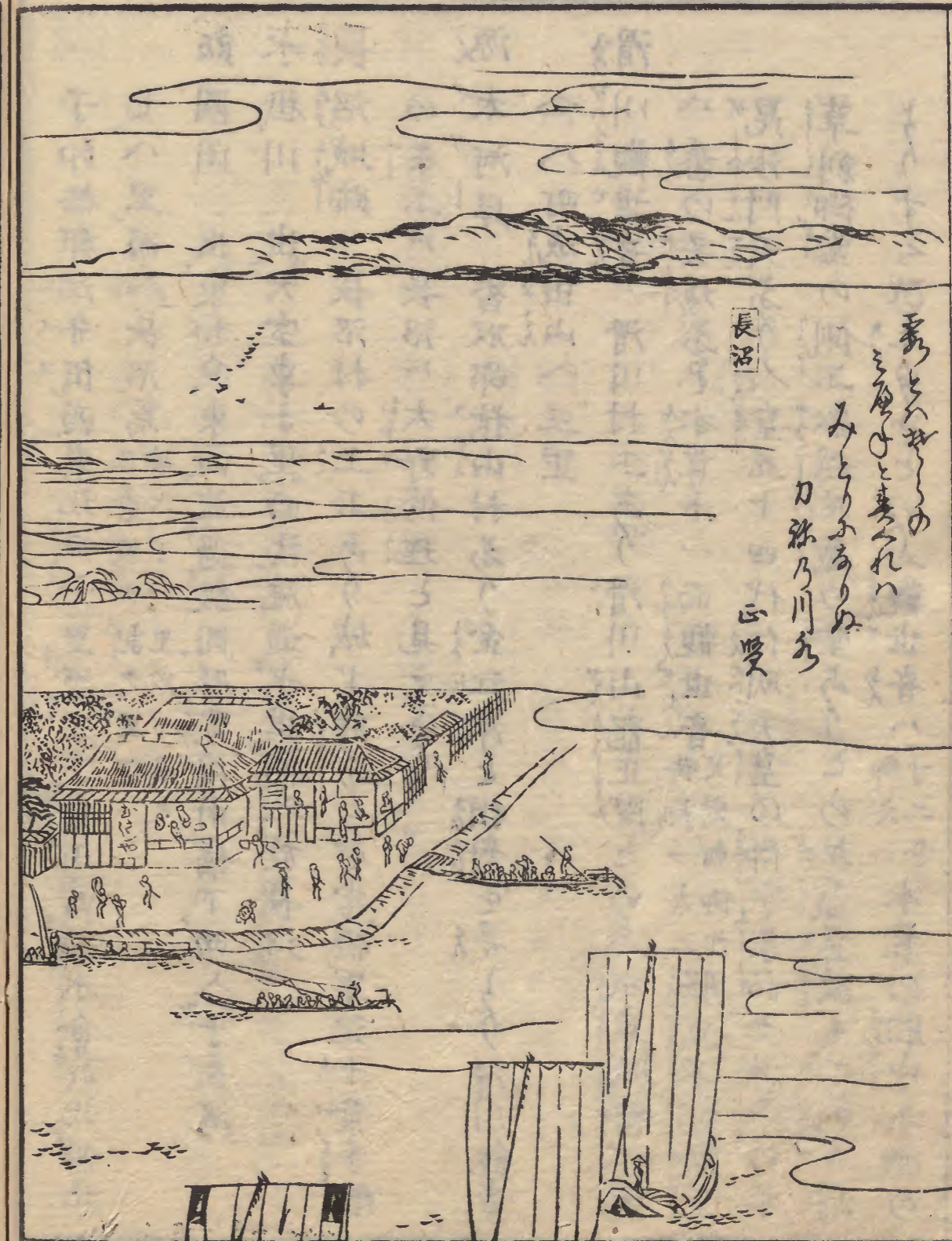
源田の岸

菊水山

春真

二十

五



長沼

新とくちの
 とくちとまのれい
 みとらふあふぬ
 刀根乃川
 心受

あまふとつふ趣起佐倉風土記云兼和七年安定朝所鑑十一面
觀世音長一丈二尺號龍正院小田將治察長一寸二分觀音及地
藏像於小田川朝日淵以觀音納本尊腹初將治感化女自稱朝日
言粉河寺來又老僧可八十網衣浸水而後得二像云鹿嶋日記小
鐘の銘小下總國香取郡大須賀保内滑川山龍正院天和二歲癸
亥四月廿六日と急まり本尊ハ兼和のところ小田宰相將治常陸
と下總のさうひあふ小田川のけさがあちよりとり出ていつ
さまつりー冥像あふよー坂東觀音冥場記卷九のふんゆふと諸
國圭齊録下總國天台宗部小五石植生郡滑川村龍正院
朝日淵 本堂より一町をり西の方田の中ふありむくハ此所
常陸下總の堰あて小田川の流さそありーあや今淵瀬かろて草地と
あり大あふとだき柙六七本ありて其下ふ碑あり彫て曰
朝日淵觀音應現碑銘

朝日之淵薩埵湯漿朝日淵聖像入網瀉瀑靈液湧消人死
感享者誰長者持治

東叡凌雲院住持探題前大僧正實乘撰
寛政九年丁巳七月

南郭集三編二十九 舟邈刀祢阻雨泊滑河村二首

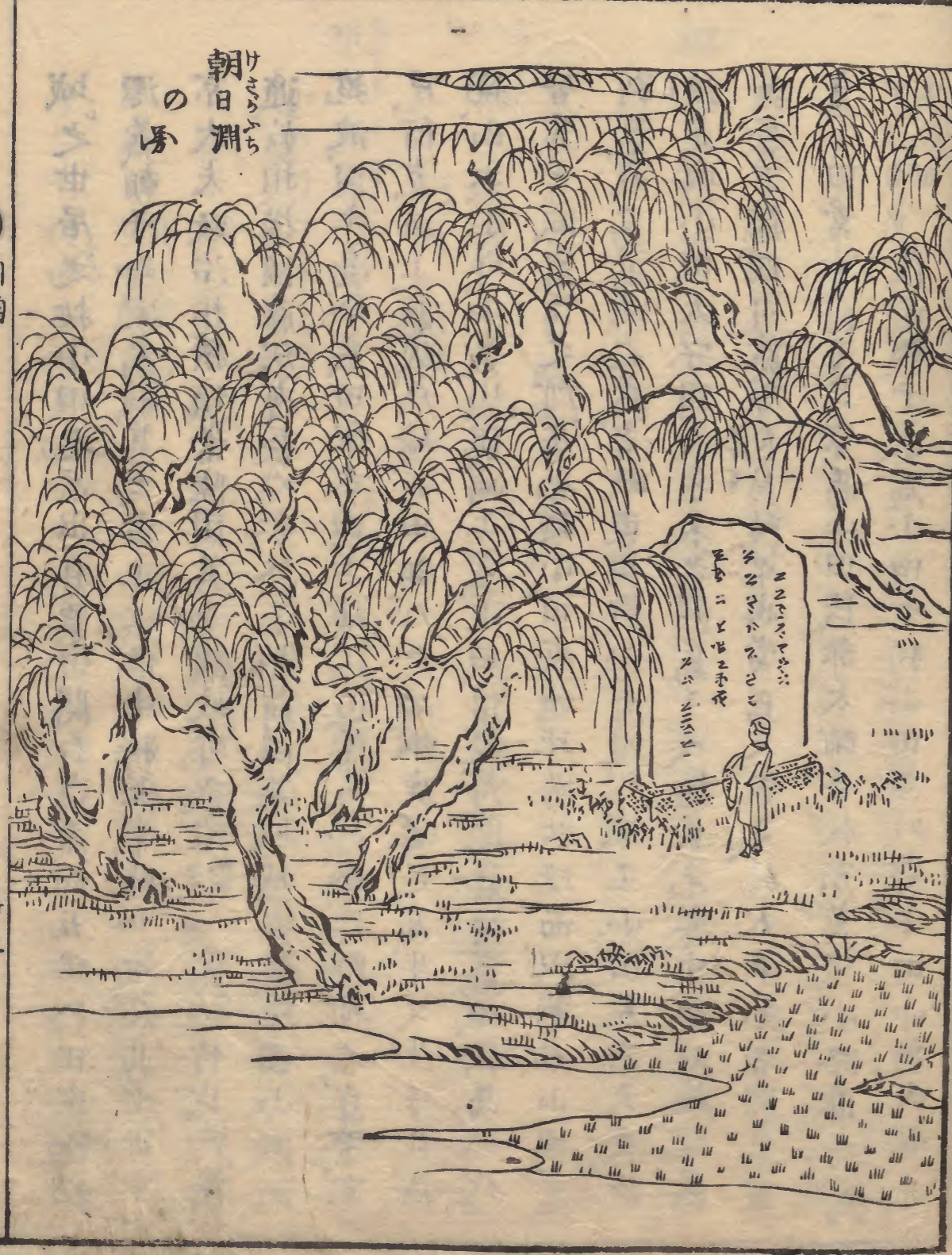
長江三百里短棹一孤舟水上迷冥雨風前避急流蒹葭投泊渚
雲霧問津樓登岸知何處蒼茫惹旅愁

江村春雨裏寥落暮煙疎挈榼須求酒臨河定得魚蓬窓從泛宅
葦笠混幽居濯足滄浪水行應隱釣漁

菊水井 滑川町入口道の東菊水山の禁ふあり方六尺をりり石
ふて圍たう清水井あり觀音の靈水とつふ側ふ菊水と云りこ
る碑あり

菊水山城跡 滑川村菊水山の上ふあり佐倉風土記云傳小田氏

朝日淵の秀



川南

廿二

五



春真

城之世居之按小田之系出自粟田関白道兼而五世八田宗綱以源義朝子知家為嗣其七世正三位中將兼常陸介治久其七世左京大夫政治相續領常陸国其子讚岐守氏治号天為佐竹氏所襲遁於相摸國藤沢慶長六年終于越前國其城址在常陸國小田而筑波田土邊今泉田伏木田土浦沢辺常名北條片野柿岳真壁完戸行方海上藤沢戸崎天田部江戸崎蝦鹿嶋足高牛久牛子生志筑山木水守小美川龍崎上室近田沼崎新間巖崎巖田掛馬八代皆其子城家臣之所居也疑小田所領地跨此境而以菊水山或為別業或為退老之處者歟東國戰記有滑川城主小田左京大夫政治是與小田太守同人乎未之詳焉。又按長元年中小田莊司義英屬下總國司藤原包昌防平忠常馬又散見於太平記者関東軍有小田常陸前司貞宗馬小田民部太輔兼秋預萬里小路藤房俗放流者於家曰預後送鄉于京馬小田少將小田讚岐守小田中務大輔亦

在馬又北條記有小田宰相政治遣其臣菅谷隱岐守率兵屬氏康為而滑川觀音緣記為兼和年時有小田宰相將治者未之詳焉恐似傳聞之誤彼姑傳疑聊辨之

耀窟大明神 同書在西大須賀村社後地有一孔拜之為神在未詳其神及造建時世俗言鹿嶋神之祖父也若由是稜威雄走神也歟

正徳五年社司飯塚氏請進正一位云
八幡大明神 同村堤の内ふあり堤の向ふ八幡沼といふぬまろりて其中ふ鳥居たてり

東三井寺 同村ふあり云傳ふ是日本三三井寺の其一ふと云
瑠璃光山千手院天台 本尊千手觀音側ふ藥師堂あり堂の脇ふ井三あり故ふ名づく歟其初め詳ふらざと後ろの山間淺佛具殿谷といひて中英不屋敷跡あり又其頃の寺田ふりとして村中ふ佛具殿田と唱ふり田多くあり。寺寶不平親皇

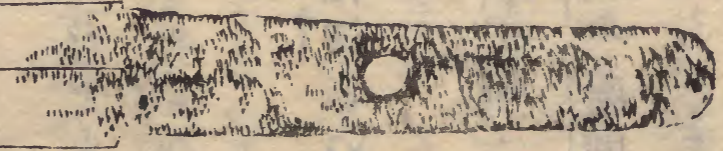
西大須賀村
東三井寺
瑠璃光山
子手院
什物

平新皇
将門
妾
桔梗之前
所持

鏡表



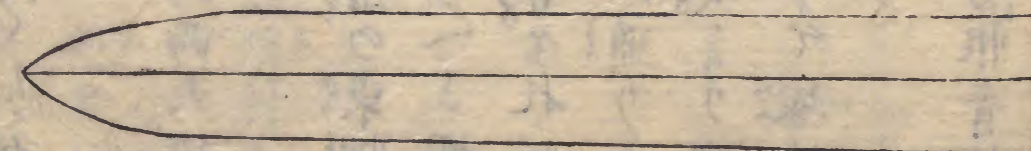
同鏡



銘
天保

大和國

同裏



將門の妾桔梗の前此鏡一面同懐劍あり里老云この二品むら
しより紛失の事度々ありしが必その家ふたり有て持主よ
り又此寺に納むる事数度ふ及べりとぞ

西大須賀城 同西大須賀村あり東國戦記に西大須賀の城主

西大須賀六郎と見ゆ

兒塚 西大須賀村の内四屋とりの所の入口道の東畑の中ふあ

と田國雜記に云ふも川ぬこの國兒の原といくる所ありいり

ふる故ふかゝる名此所を侍るそと里人ふ尋なればあのを在

白浪青林横行の地たるふよりとある少人此通りなるふ衣装

など剥とる此とあらず剥へ殺害し侍りる夫より此所残かや

らふ号し侍るより語侍れば今更のこちちて塚にほとり

立よりておもひつゞけて廻向し侍る

佳人落命荒原上 薺庭古碑空刻名 勿恨青林犯花影

浮生有限辱兼榮

白浪小浮名残茶がに兒の原戀ぢふをつる身とも聞バや

標注小兒の原下總國香取郡大須賀村の道の邊小兒塚あり此

邊則兒の原也今叢祠鳥居ありて里俗兒大明神と云壇生郡の

是ハ香源太河岸より香取郡の滑川觀音ふつこの間也小異

取郡也源太河岸より行ハ滑川觀音夫より西大須賀村と過て同村の

東國戦記に所ノ名ヲ問ハ兒子が原ト申ケル下總守義長西大

須賀六郎ニ向テ兒ヶ原ニ謂レ有ヤト云申上ケルハ昔小菅且

林寺ノ住寺智證上人此處ニ間居ス或時智證隣村ニ行日暮テ

歸リシニ此原二年頃十五六ノ童子顔色青ザメタルガ立煩居

タリ上人云御身未ダ若年日暮ニ及テ何方へ行者トト見卷テ

曰某ハ都方ノ者ニテ候處喘息ヲ長ク煩シガ家乏シク療治不

叶故清水觀音へ七日籠り候所滿ズル夜ノ夢ニ下總國西大須

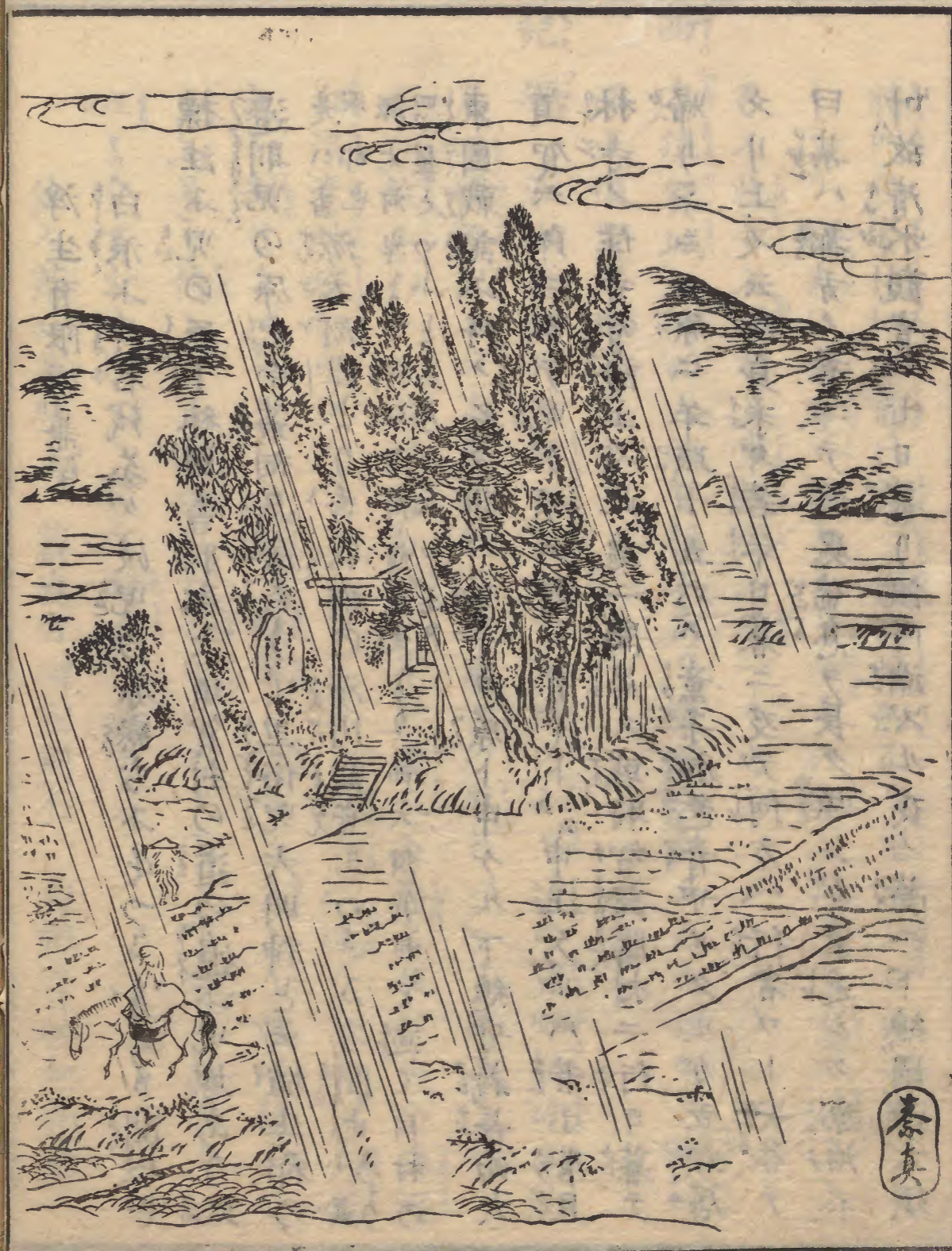
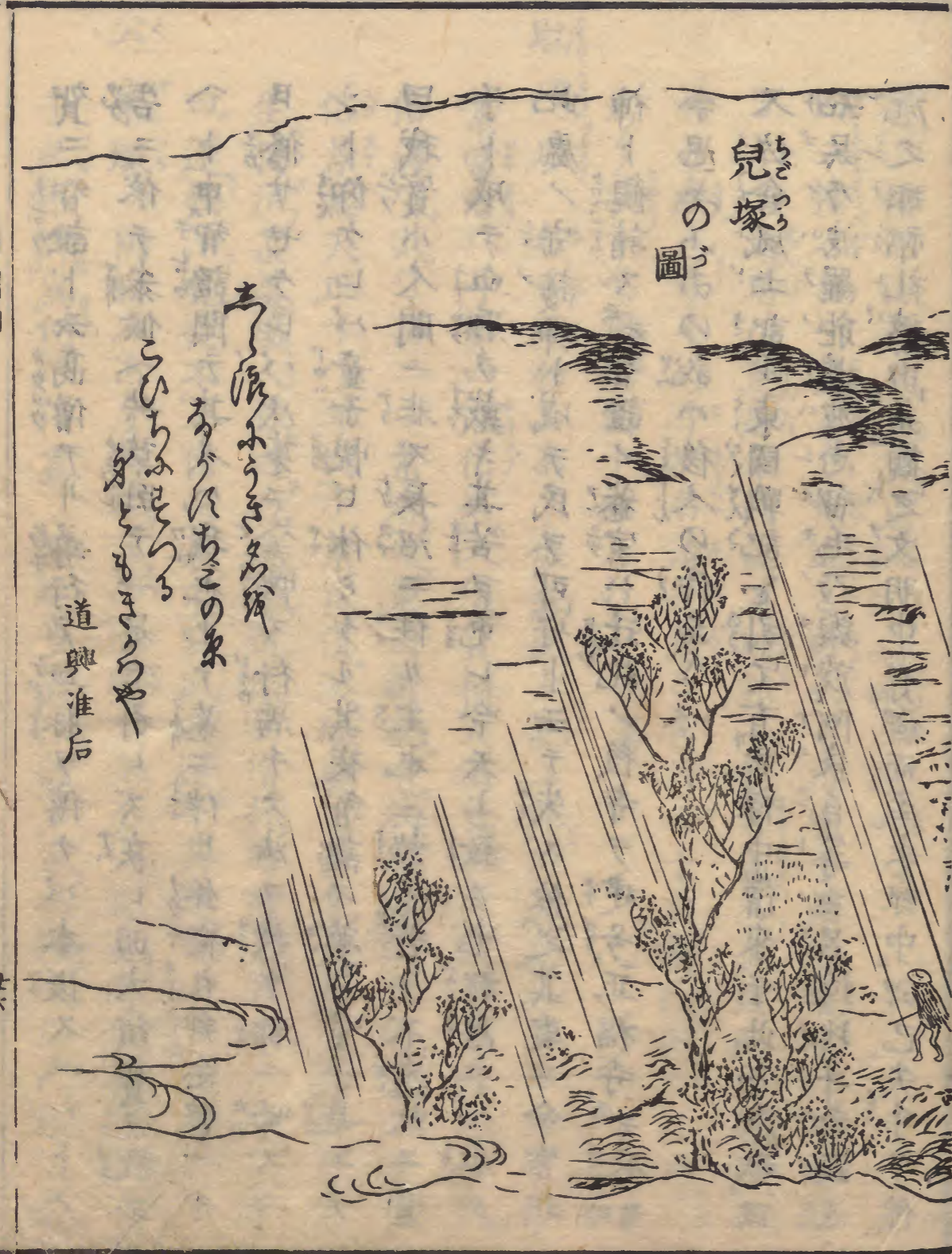
兒塚
の
圖

高橋ふらき名坂
あがれちこの木
こひちみさるる
身ともさるるや

道興准后

川南

廿六



春真

賀ニ智證ト云高僧アリ尋行テ血脉ヲ傳ナバ本復スベシトノ
告ニ依テ叅候ヘ共草卧テ一足モ引レズ哀レ西大須賀ヲ教王
ヘト申智證聞テ其人ハ我也トテ菴ニ伴ヒ昼夜礼拜念佛一千
日修サセケレバ次第ニ全快ス行滿チテ法ヲ授ケ都ニ歸スベ
シト仰ケレバ童子悦ビ休ミケル其夜智證ノ夢ニ童子見エテ
曰我實ハ人間ニ非ズ長沼ニ住ル主也三熱ノ苦ヲ不道故ニ童
子ト成テ血脉ヲ戴キ其苦ヲ免レ今天上致ス也報恩ニハ永ク
此處ノ守護神ト成テ民ヲ可守ト云テ失又依之其處ニ今宮明
神ト觀請ス云智證ノ菴室ハ遷化ノ後寺ヲ建号正福寺云文略
今思ふ小あの説ハ後人の作あるべし
又佐倉風土記小東國戦記を引テ有永祿中僧來于此而詠歌曰
知具乃波羅能遲波志留毛乃與茂阿良自等古呂迹比斗都迺志
流之那邪礼婆由是觀之文明中有碑而至永祿中碑已失乎今僅

有テ小祠而俗謂之兒宮馬近年マ之祠の側小
因云幡谷村ハ是より程近き所也市川團十郎父幡谷村の産
了より馬馬か芝居年代記小堀越十藏生國ハ下總國佐倉幡谷
村の産ふりその子知名海老藏と名唐犬十右衛門名づく所
あり長トケ市川團十郎といふ取意
助崎城 名古屋村にあり佐倉風土記小距佐倉東北三十六里千
葉常胤六子第四胤信居大須賀稱大須賀四郎後退老於此而稱
信濃守其子孫二十葉居之東國戦記有助崎城主大須賀信濃守
信景馬天正十八年與千葉氏俱滅城廢馬壘有舊新二址其舊處
生獨活甚美盛人採之乃為崇近歲村僧採而還菴其夜戶外有聲
曰還獨活竟夜不止僧怖畏不寢夙興還於其處云
公家塚 同村にあり其地言小御門至今不得畚菴傳有貴卿流卒
干此味詳為何人俗言 朝廷貴爵人謂公家也按元弘之亂笠置

川南

廿七

城陷北條高時執^テ後醍醐帝近侍諸卿流^ス之遠國平大納言師賢^{モロカク}
配^シ下總國寓^ニ于千葉貞胤乃薙髮名索貞遂卒^ニ于下總實元弘二年
十月而南朝追謚^ス文貞公車出^ツ公卿補任增鏡常樂記等初師賢詐^シ
稱^シ主上登^ル于叡山今以^テ小御門名推^シ之恐師賢墓與

高岡 香取郡あり源太河岸より十五六町東の方井上侯の陳宮
あり石一万天正十八庚寅年領地拜領下總國香取郡高岡二万石

阿部豊後 龍安寺 大和田村あり諸國圭齊録下總國曹洞宗の部ふ二十
一石七斗餘 香取郡大和田村龍安寺と見ゆ

迎接寺 佐倉風土記在^ニ冬父未詳年歷佛器多識永仁三年有^リ觀音
關魔夜叉等假面十餘枚言^ハ惠心之所作云^ハ此の寺に鬼の舞と云
大とあり關魔大王ふと美々しく衣冠を粧ひ皆面をかあり赤
鬼青鬼など多く出地獄ふて死人を責るまねをかさいと賑り

了々鹿嶋日記ふ下小堀村の淨福寺の佛事小鬼の舞と云あり
是も廿年小一度にふるにさふと佛の假面鬼の假面牛頭馬頭
などの假面いぢきもいとくふるものありといり 下小堀村ハス

父より神崎佐原津の宮ふと 名木古城 佐倉風土記ふ云在^ニ名木距佐倉東北四十里傳紫山彈
正居之未詳其時世馬東國戰記所謂名木彈正忠是乎

神宮寺 並木村あり諸國圭齊録新義真言部ふ十四石四斗餘
香取郡並木村神宮寺あり

神崎明神 神崎ふあり利根川へあり出たる高き山の上ありむ
か一此山の麓屈曲の所水逆卷て船の通路至てむつろく是
を神崎の巻と唱へて船人大小恐る所ありと云り今ハ此洲
し其項れ舟明ありとてあつと神崎森の下楫をよくとき船主
どのの唄今もよくうとふ

川南



廿九

春真

神崎明神
の圖

男女浦
ニツ塚



香取志云神宮を相距度三里餘同郡神崎村不在傳云面足尊惶
 根尊を祭まりと此社今神宮より幣帛を備せ封物を與せ別官
 より神地を賜りて神事を執るべき末社非也然共昔大戸神
 崎兩莊に別て神宮祭祀の用途を掌り改造の時ハ臈殿を造る
 定役也又此兩莊ハ大祢宜家の旧領也長寛二年六月関白左太
 臣家政所御下文不見えたり斯て大戸社末社なきハ神崎社も
 昔末社ある度決ふ

追考應保二年六月三日の大祢宜日記云又於次男知房者申補
 神崎社宮司可知行彼社領之由書與讓狀畢又嘉元二年四月廿
 二日大祢宜實綱与棄狀不讓與下總國香取社領云大戸神崎村
 田櫻田以下神祭物等之事是等の文を以て見れば昔末社ある
 む度愈明け
 鹿嶋日記云かうざら此神社不詣づ社の前ふふんどやもん

トヤとよぶ大樹ありいと年へたる桂の木なりけり
 神代より志けりてたて湯津桂さかえゆくらんかたり志
 らげも

山桂 本草綱目月桂條
草木錦葉集六
 枝葉とも白ひひ
 樟腦のおと一剪
 トて吞バ桂枝ふ
 似たり實ハ榎の
 實不似て皺あり
 茶色あて少黒
 を帶たり八月頃
 落る花ハ大木故
 見えがと



宗且寫真

その神崎てふ地名へありしを西北の方北河むかひ不清久
橋向押砂などいふ村ありいふ一へハカ根の河面不流とさた
り一ノ元和慶長のところかなと此方不水せく堤を築て新田を
むらうきたありとそ我のち系とい常陸國河内郡の半田の里
不さ一むらひて二里をくりけ大沼ありこの神崎の地へさ一
出たる山崎ありて神の社阿れば神崎といつへりとあんこよ
り見渡一の中嶋不片葉葦もろそあ一とて二くさの葦生たり
上つうさるふいそろそあて陽あま下つあさなるハ片葉不
陰ありそれ嶋をふとつとぬといひその浦狹男女此浦とい
ふ平治元年の社圖不大浦とも真世守良ともあるいこれあり
その嶋不大神天降ま一を今の地不うつ一まぬらせたり半
田此里あても此神をうつ一ていそひやうりけん今俗不た一
まさはといふ社ありそい安婆嶋のよこなうりあやこの近さ

こころりある安波大杉明神もかよひてたこ仲常陸風土記不は
安婆之嶋とみえさうりそのふたつ嶋より時々龍燈あがりて神
崎の社不か、り志バ一ありてもと此所不うへまねつること
ありとあんま一三代實録不元慶三年四月下總國正六位上子
松の神不從五位下を授らま一ことみ田神崎の西隣の里不今
も小松村ありて正元元年十二月の文書同二年三月此文書不
どに小松郷みえたるをねり不これぞ子松此神あること疑
あうりける

諸國圭齋録下總國部不二十石大明神 香取郡神崎郷 神崎伊織
と見ゆ

押砂河岸 神崎と相對て川北あり中古大水の篠砂お一來りて
出來一地ある故押砂と名つくとつ小安波大杉明神へ參詣の
人いさね此河岸より土一安波へ一里半

押砂河岸よみ
神崎眺望の圖

五



素真

利根川
おほら
おほら
おほら

大日山



川南

世二

大須賀川 ちく大戸川ともいふ香取郡大須賀原の邊より出て
北に流き大戸川に至り西流とあり一は北川尻沼谷原の間より
利根川に入り一は利根川より東に流れ岩崎下より利根川
に落つたれを粉名口川といふ

大戸神社 香取志云神宮城相距二里同郡大戸村にあり社家
傳説天武天皇白鳳年中建此社所祭手力雄神也此社の祭祀數
度あり大槻神宮祭祀小槻又神宮より諸神饌幣帛を備せ神地
神戸を分與て祭祀の用途小充並祠職の秩録とを神室龍面此
最奇物也木も非金石の類も非因て人作も非と昔同郡
矢作野に天降るとぞ今此所を天降と號し里に祠を建て祭ま
り村里早魃する時請雨塚と云ふ処に此面を出し三度水を濯
時ハ必龍起て雨を降すと云
佐原川 一は同郡折幡より出て新市場を過牧野に至る一は大

崎邊より出牧野に至る一水とあり佐原大橋の下をきだて利
根川に入る
佐原へ下利根附茅一繁昌の地なり村の中程に川有て新宿本
宿の間小橋架架と云米穀諸荷物の揚さげ旅人の船川口よ
り此所まで先をあらそひ兩岸の狭さをうらみ誠小水陸往來
の群集昼夜止時あり
諏訪明神社西の方村をつき小有新宿組の産土神あり例祭九
月十五日より十七日迄也牛頭天王社東の方濱宿といふ所小
河に本宿組に産土神と云例祭六月十一日より十三日迄此
両祭礼至て賑はしく何れも二重三重に屋臺十四五輛つゝ花
をかざり金銀をちりばめ錦繡の幕を懸嘩子元の拍子つと
ふざやり小町々をむき廻る見物に群集人の山をなすこと
とに目ざしり祭あり

香取魚彦ハ佐原橋本町伊能茂左衛門と云類則の香取四家集

良称茂左衛門彌青蓋香取郡佐原人畧既長篤學嗜古游賀茂真
淵之門學益進畧其作歌以萬葉集為歸別為一家趣傍善画好寫
梅花及鯉魚騰泉之類亦為世賞玩天明二年三月二十三日歿于
江戸濱町橋居年六十其在江戸以自稱香取魚彦故以香取氏顯
所著有古言抄萬葉集千歌筆端記兩
夜燭百人一首傳魚彦家集等若干卷

二本竹 鹿嶋日記云、諏方神社の鳥居をもち死ていと高き石坂

をたがれば、山のえらに別當の坊あり、坊の薮ふ天明三年とい
ふより此夏とみふふりといれ竹生出けるをり、此里志らり、

殿、津田日向守平、信之朝臣のよみたまへる歌あり、

松栢のとれをれきふらぢりてや生かけり、竹のふらり

南郭集 十卷 將發佐原半七彦十載酒到舟留示二子

期日將廻棹不關乘興輕一樽携酒別二子即舟情信宿交相得

江山感且生水郷來往熟重聽竹枝聲

寬齋遺藁 佐原訪此江山主人不遇因作

千里游踪偶遠尋柴門空鎖碧江潯閑庭就欲題名姓春淺芭蕉未

展心

津宮河岸 香取神宮一の鳥居水中不建り、是より香取

の人ふ此、河岸より上り神宮へ參詣也、津宮の名義ハ當所不窺

神社といふありて、香取志ふ奥津彦神奥津姫神を祭まり、此神

ハ古事記云、須佐之男命の孫大年神の子あり、延喜式云、窺神二

座、從五位上大邑刀自、次小邑刀自、やいろと素津宮といふ、

そもく津といふ、湊入の船おのく、その處不集風を待つ、ときと津

といふ、その所を船のたしとふ所ろ、鹿嶋ふハ今大船津といふと

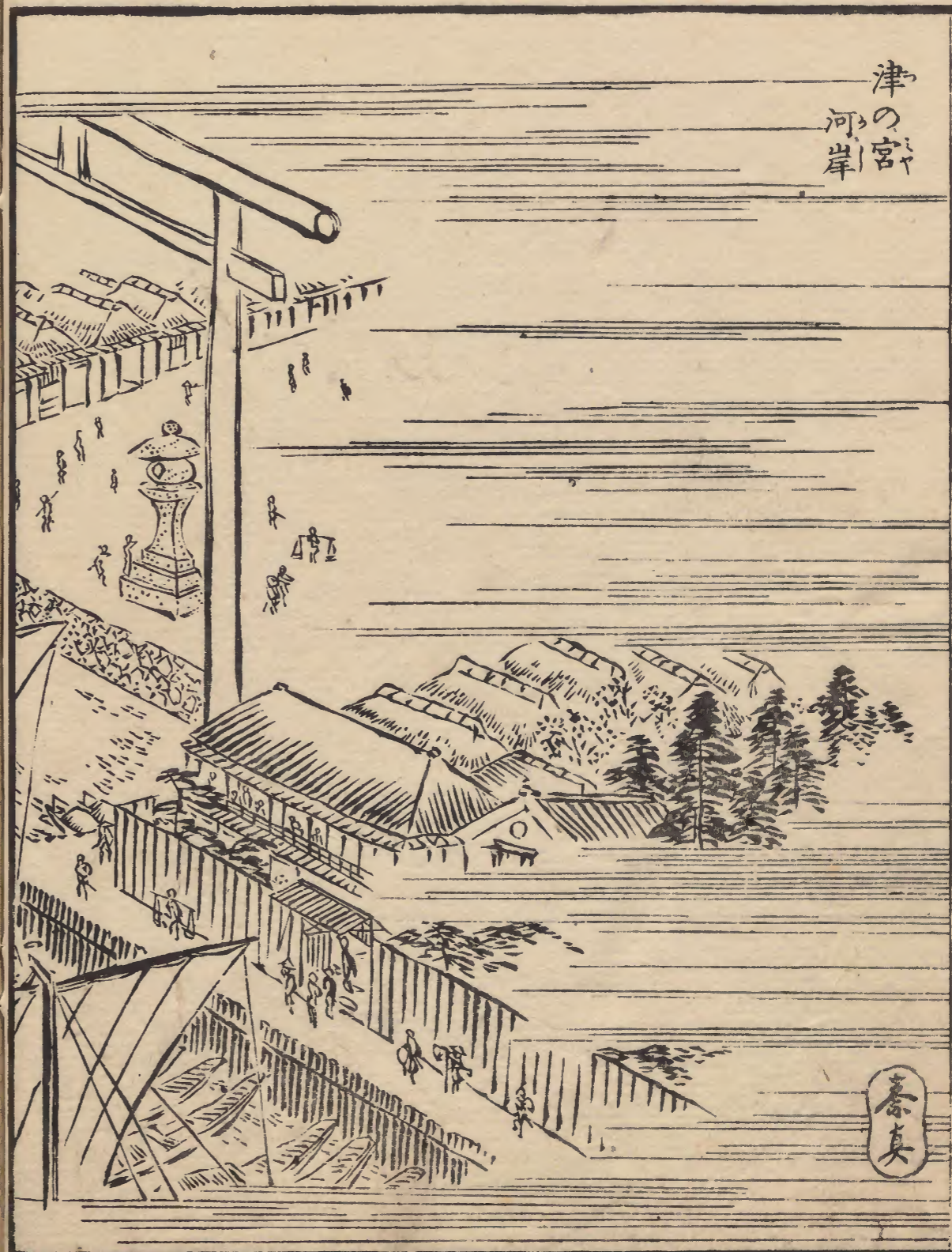
もいふ、ハ津宮と云ひ、ハ風土記云、見ゆ、吾神宮の津宮

ハいふ、ハ船の來集ハ所ふ了故津といひ、その津鎮護の宮た

ると、以て津宮といひ、ハ了庵、その後人居とあり、村の号と

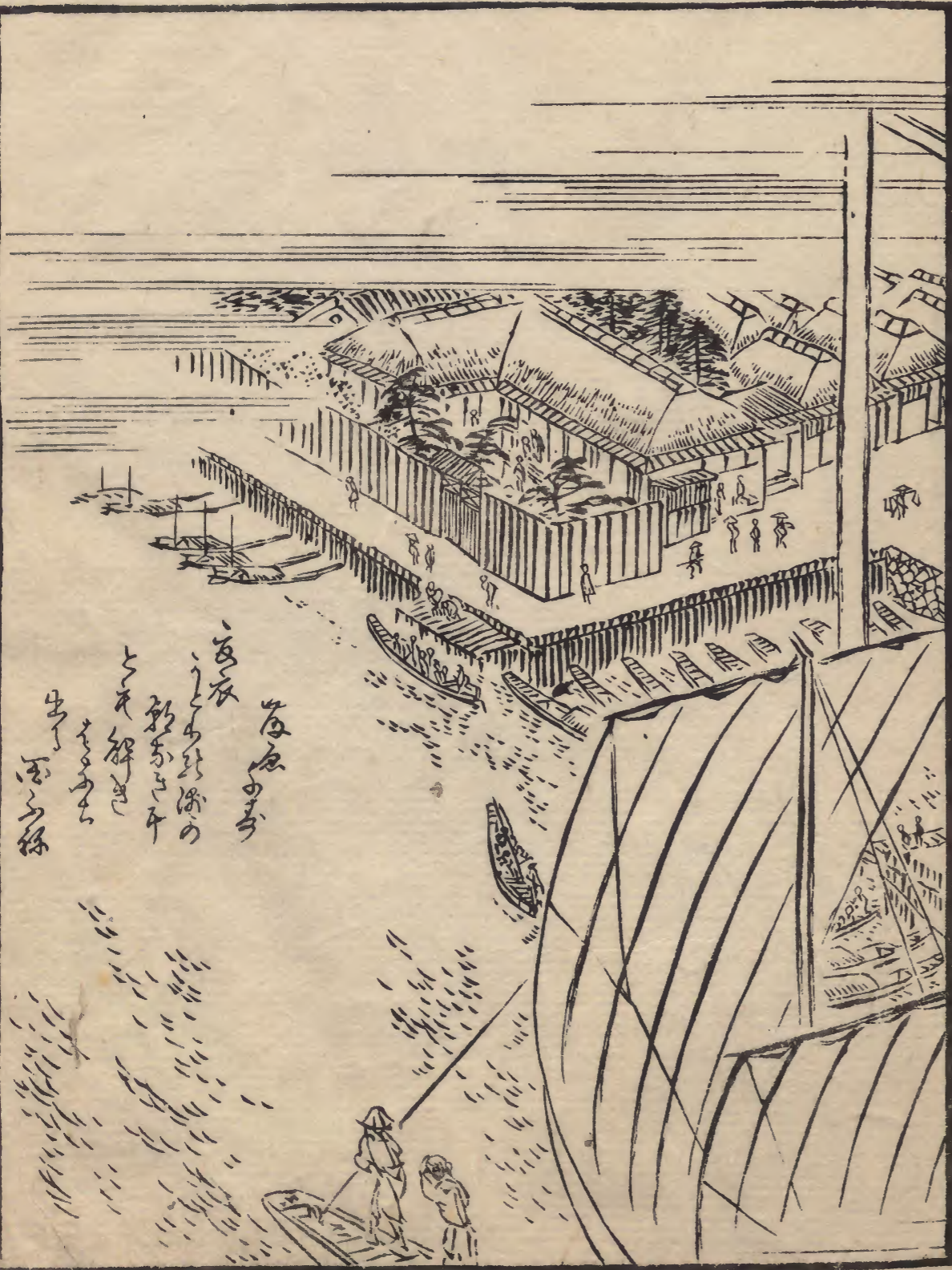
もあきり

津の宮
河岸



泰真

川



津の宮
河岸
新築の
とて解き
出さる

三十六

香取大神宮 下總國香取郡正殿經津主大神神代よりの御鎮座

ふていと古き神あり、夏ハ香取志不詳ク、冬ハ畧之

相殿神

比賣神 天兒屋命 武甕槌神

攝社末祠、すべて八十末社之と畧之

大小の祭祀、すべて九十餘度内十八箇度大祭祀畧之

神寶

廣矛 于滿兩顆 神楯 太刀 矢 鞭

此外古器古書等數多

名所

龜甲山 木母杉 弓掛杉 乍候杉 三本杉

牧野 釜塚 笠塚 鹿塚 星塚

神井

御手洗井 氷室井 龜井 大坂井 琵琶井

下の井 真禰井 西隱井 東隱井 奴久井

石井 太刀洗井

七橋

大坂橋 五段田橋 萱田橋 小山橋 下井橋

氷室橋 地口橋

八坂

大坂 龜邊坂 若宮坂 下井坂 氷室坂

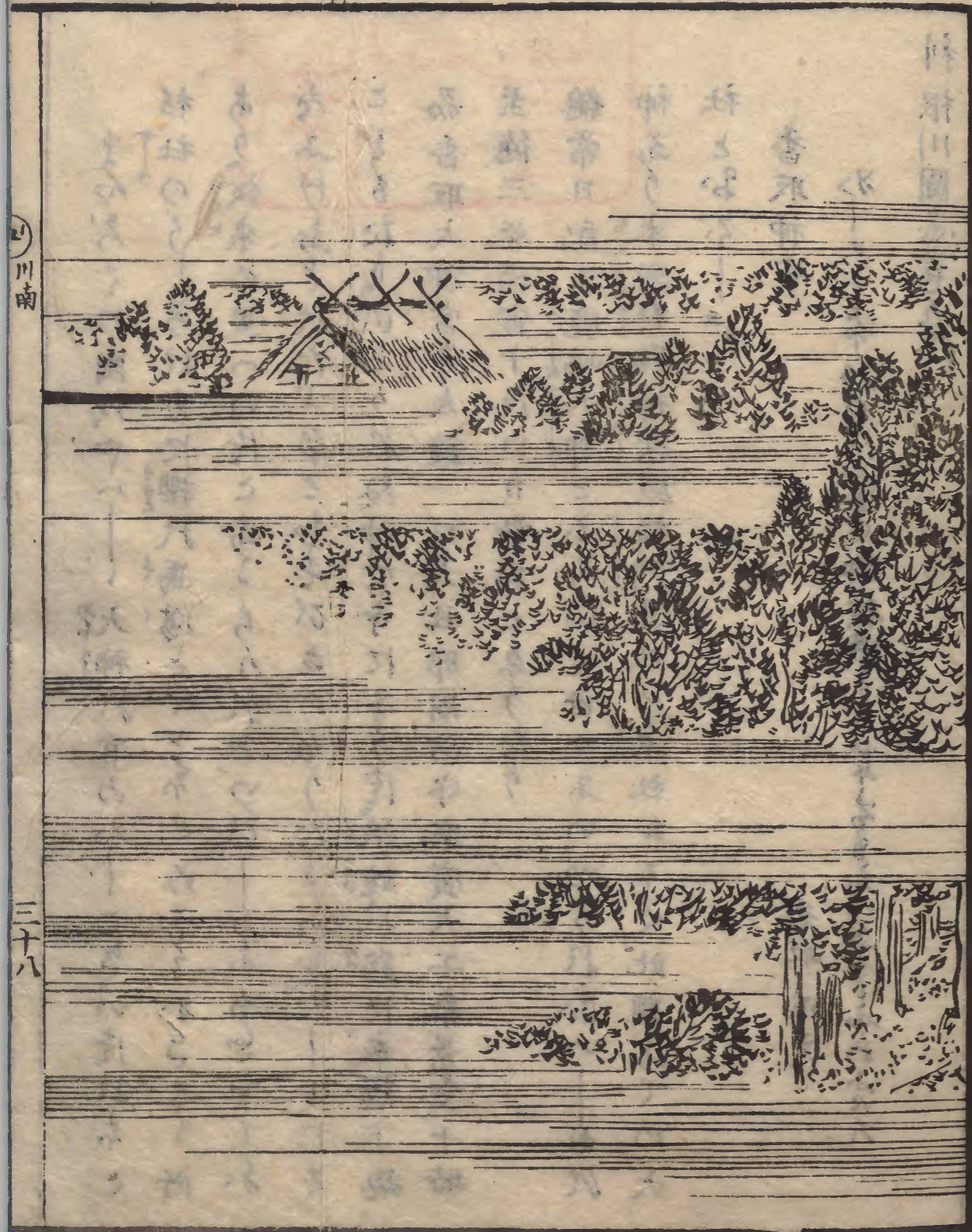
御手洗坂 奴久井坂 幸若坂

此外名勝古跡數多

鹿嶋日記云香取神社にまうげ、御まへの庭に大坂、杉、榎、

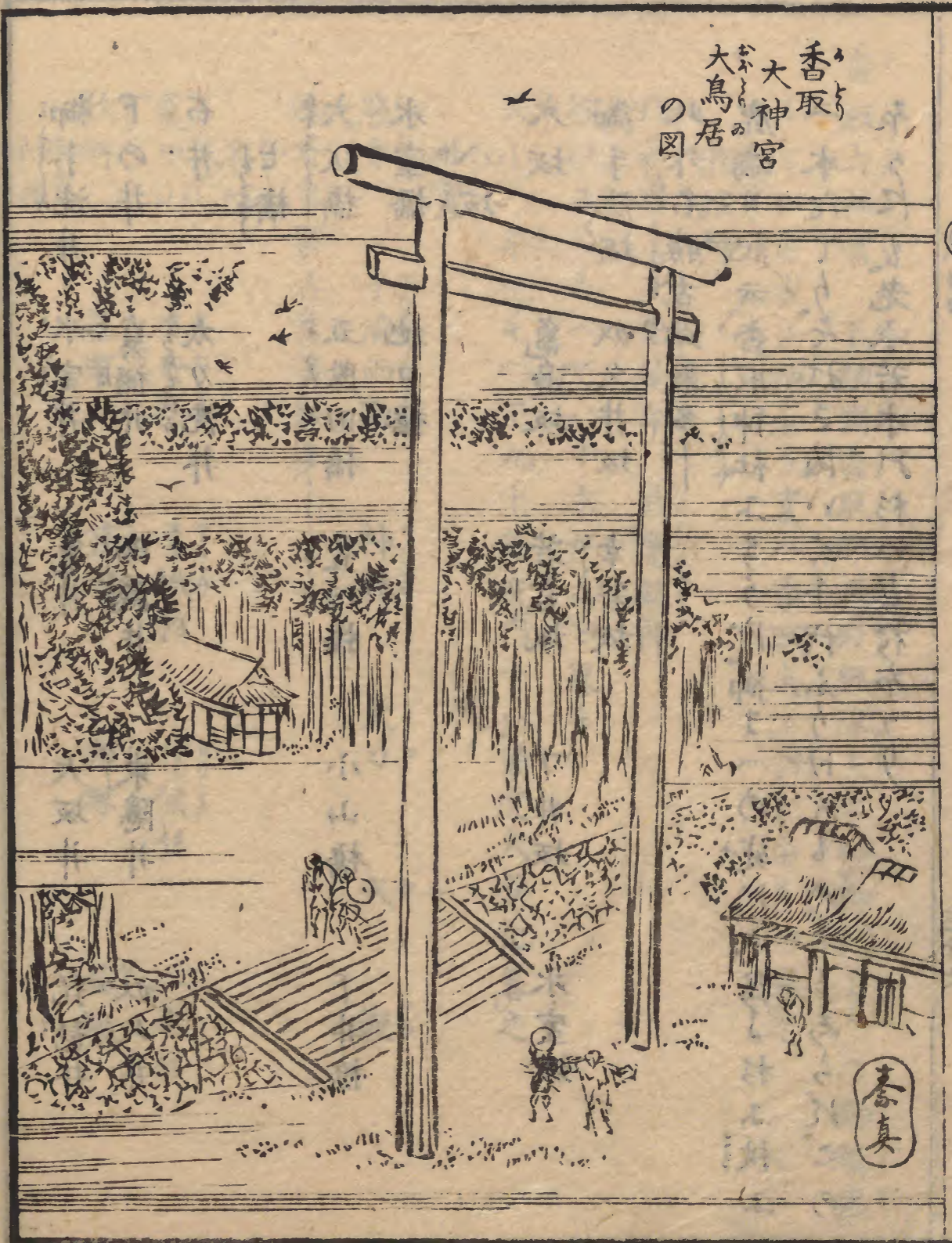
二本たてり、そのまは、いく千代ふりけんものともあらば、この

なりにも、老木若木、杉いとわぶり



川南

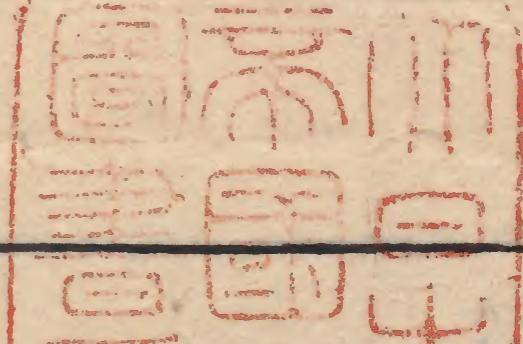
三十八



香取
大神宮
大鳥居
の図

五

香取



まろろをぬ國戎やへー大神は宮わかーこさいたれふと
杉社のうしろ此方に櫻井馬場とそとなくみさるわさる所
あり板來の里への代とあるらんれどつひしうふをどとらか
たふけふとれたるひとむをび立のかりたさあぞたしうにそ
ことともたむひとくれぬ神宮寺にまうだ洪鐘は銘に奉懸下總
易香取大神宮寺大鐘一口大且那周防守宗廣大工泰景重干時
至徳三年丙寅十月口日敬白とるりたり

總常日記不鹿嶋大神とふらひて世々不いつくれおへーぬに

神あり本殿并殿神樂殿樓門其外の末社おろく此國あての大

社とおろく云

香取神宮

香取正文

かーあろろ布那の法雲の御後威より草布もあつたまをめまん

